石井勲の漢字教室

4　親こそ最良の教師

II 対談・幼児と漢字をめぐって



「春男の翔んだ空」について

ー　映画「春男の翔んだ空」とは……

遅れているのは知識だけ」

五十年春、「春男の翔んだ空」を観、その感激にまだひたっていたある日のこと、その映画の脚本から制作までを担当された山田典吾監督と対談しました。

この映画は、北九州市の特殊教育に献身的に取り組んだ野杉春男先生を、俳優ならぬタレントの永六輔氏が演じたものです。特殊学級は東京教育大学附属大塚養護学校が協力して、永六輔氏がその新任の先生として子供たちに臨み、子供たちは永氏を本当の先生と信じてその指導を受け、そこに自然に（つまり、全くの作為なしに）展開される場面を、子供たちに知られない場所に設置された望遠カメラによって撮影したものです。

永氏はこの映画に主演することを決心したことについて、父親の言葉「生きているということは誰か

に借りを作ること。生きてゆくということはその借りを返してゆくこと」の「借りたものを返す。それも自分のできる方法で返してゆくことが、この野杉春男先生を演じることなのだ」と語っています。

また、永氏は、この映画に出演する以前から特殊教育に関心を持ち、施設を訪問したり、お手伝いをしてきたりしていて、心身障害児について深い理解を持っていらっしゃる方です。そのことは、「知恵は遅れていない。遅れているのは知識だけだ」、そして「人間を不幸にしてきたのは知識なのだ」、「心身障害というけれど、心は病んでいない。心が病んでいるのは彼ら以外の僕たちだ」という永氏の言葉でよくわかります。

こういう永氏によって野杉春男先生が演じられ、天真爛漫（らんまん）な子供たちは、これを自分たちの本当の新しい先生だと信じている関係から醸（かも）し出される場面の数々は、いかなる名優も及ばないものがありました。

山田監督が、この映画制作を思い立った理由を知ることができるものとして、シナリオの解説書の末尾に次の一文があります。

「養護学校中二の娘美樹は、今でもI＋I＝2と答えられない。足し算は何でも〝5です〟と答えてしまう。それが多少の言語障害で〝5レス〟と聞こえてしまう。だから近所の子は〝ゴレス〟という怪獣みたいな仇名で呼ぶ。〝中学生でI＋Iもできない。バーカ〟と今日もいじめられてケガして帰って来た。母親は怒って、そのいじめっ子の家に押しかけたが、〝子供の喧嘩に親が出た〟と逆ねじをくらって帰って来る。その子の学校に電話をする。〝学外のことでありまして、学校といたしましては……〟と取り合わない。

地域社会でこの子たちは遊ぶことも許されない。知恵遅れの子がいじめられている姿を見たって、知らぬ顔をしている大人たち……。

そんな大人よ。そんな子らよ。普通児の担任先生、校長先生。〝春男の翔んだ空〟は、そんなあなた方に是非見て頂くために、わたしは一生懸命に作ったのです。わたしたちに連なる親たちの涙が、フィルムとなって回っております。」

知識を蓄える教育ではなくて、知恵を磨く真の教育を知るためにも、私は「春男の翔んだ空」を一人でも多くの皆さんに観てもらいたいものだと思いました。この映画を観たら、「心身障害というけれど、心は病んでいない。心が病んでいるのは彼ら以外の僕たちだ」という永氏の言葉がよくわかるだろうと

思い、醜い心を矯めることに努力してくれる人が増えるのではないかと思います。

特殊教育の父・野杉春男先生

北九州のペスクロッチといわれ、特殊学級教育に半生を捧げた野杉春男氏。飛行機事故のため志なかばで倒れた氏と、その教え子たちとの魂の触れ合いを通して、教育の大切さ、愛の尊さを描く感動作。

「もともと地上に道はない、みんなが歩けば道になる」を信念とする野杉春男は、自ら進んで小倉市立三郎丸小学校特殊学級の担任となる。

言葉では言い表わせぬ差別と世間の冷たい眼をよそに、愛し合い、かばい合いながら育っていく子供たちを見るにつけ、この子らこそ、本当に優しい、傷つきやすい子供たちなのだと知り、読み書きから下の世話まで、献身的に子供たちのめんどうをみる。

時には、自らが偽善者ではないか、とも思い悩みながらも、子供たちに慕われ、愛される野杉は、次々と新しい世界を切り拓いていく。

算数の時間には、指導棒で時計を叩き、その数で時間の見かたを教えた。自転車の荷台に子供を乗せ、街の看板の字を教えていた時のこと、通りの角を曲がったとたん自転車が大きく揺れ、荷台の子供が落ちそうになった。すると、そこにあった看板を指さし、「危険」の字を文字通り教えた。こうして、教育効果は着々と上がっていった。

〝親こそ最良の教師〟を旨とし、生死をかけて教育に情熱を注ぎ、親の愛情と周囲の理解を求める野杉。それに呼応するように、子供たちも明るく育っていった。

動物を愛し、競争馬の世話の仕事に意欲を持つ知恵遅れの子供や、幼稚園の徒競争で転倒した女の子を抱き起こす競争相手の男の子など、我が身をかえりみず相手の世話をやく子供たちの純真な優しさと明るさが、次第に周囲の共感を呼び起こしていく。

そんな折、重複障害児教育の調査研究のためヨーロッパに出かけた野杉は、モスクワ郊外での航空機墜落事故のため、ついに還らぬ人となってしまった。

ようやく世間の人も理解を示し始め、特殊教育も軌道に乗り始めた矢先の悲劇だった。

絶望と悲しみのどん底に突き落とされながらも、野杉の遺志を継ぐべく、残された者は、より一層の

特殊教育の前進を、お互いの胸に誓い合うのであった。

以上が『春男の翔んだ空』の大体のあらすじですが、映像のすみずみから、特殊学級を育て、特殊教育の父と慕われた野杉春男の足音が、今もはっきりと聞こえてきます。

それでは、この映画を創った山田典吾監督の略歴を紹介しておき ましょう。

山田典吾　大正五年東京神田に生まれ、開成中学から、日大芸術科へ進む。田中栄三氏の「髑髏（どくろ）の舞」等に感激し、内弟子となる。田中監督の下で沢村兄弟プロの「少年忠臣蔵」や「橋本左内」などの助監督を経て、昭和十一年ＰＣＬに入社。戦後、第一協団を結成、昭和二十六年に吉村公三郎、新藤兼人氏らと近代映画協会を設立、新藤監督の「原爆の子」その他の作品にプロデューサーとして力を尽くす。二十七年に自らの手で現代プロダクションを創立し、「蟹工船」「夜の鼓」、今井正監督の「真昼の暗黒」などの名作を手がけて、独立プロ陣営の旗手として活躍。代表作に「ベトナム平和へのたたかい」「告別」「日本大学」「太陽の詩」「春男の翔んだ空」等がある。最近では「はだしのゲン・ひろしまのたたかい」が上映され、話題を呼んだ。

2　脳障害児の漢字教育について語る

対談　石井　勲

山田　典吾

教える側が誤解している

石井：最近、島根県の出東小学校で漢字教育の指導をしてきたんで すけれど、この学校には特殊学級がありましてね、精薄児が四人いるんです。ここでは「石井式漢字教育」を始めたばかりですけれど、この指導をした先生の反省のレポートがここにあります。私、これを読みまして、それから実際指導するところも見ましたけれども、子供たちが漢字教育を受けるようになってから目が輝くようになった、というのです。そのことはこのレポートにも書いてありますが。

実は、精薄の子供たちに対して漢字教育をしたら、子供たちの目が輝いてきたということは昭和三十年代にすでにそういう実験報告があるんです。神戸の大橋中学校の特殊学級で、辻昌子という先生が、それまでのかなに代えて、漢字をどんどん教えたら、とたんに子供たちの目の輝きが違ってきた、と報告しています。



山田： ほう、これまでの常識では、ちょっと考えられませんね。

石井： やはりいまだにそうなんですが、「精薄の子供たちは、知能が低いから漢字はとても学べない」、という考え方があるわけなんです。それで漢字を教えるにしても漢字にかなをふるわけですよ。また、〝危険〟という漢字を教える場合に、「キ、ケ、ン」と言って一音一音離して教える。実はこういう教え方をすると、知能が低ければ低いほどわからないものなんです。教える者は「キ、ケ、ン」と分けて言った方がよくわかると思っているようですが、実は 反対にわかりにくくなる。

山田： 私はね、八年ほど前に「太陽の詩」というシナリオを書きましてね、映画に作りました。文部省特選になって文化庁から奨励金もらったんですけどね。その映画を見て感動された藤岡弘明という先生が中心になって、岡山に、タケノコ村というのを建設しました。そこには「タケノコ学級」があって、映画にもなりました。

そこを見学したとき、中学一年から三年生ですけれど、「タケノコ通信」というのを作らされていました。各自、一ページ責任を持たせるわけですよ。七人なら七人で、一人一人が、一ページ責任を持って通信文を書くために、漢字はどうしても覚えなくちゃいけないということで、「タケノコ学級」の先生が作った字引きがあるんです。わからない人は、その字引きを見て漢字を書く。すると書けるんですよ。初めから一ページの責任を持たせるというのが、字引きを根気よく引いて、いい紙面作りに努力してるわけですね。

石井： 子供に責任を持たせたのがよかったのでしょうね。

山田： もう一つは、先生の「石井式漢字教育革命」にも書いてありますけれど、身障児は根気がございませんよね。「タケノコ学級」では、一生懸命粘土を六百回、七百回こねさせまして、根気をつけさせる。その結果が字引きを引いて、忘れた字を書かなくちゃいけない、漢字を覚えなくちゃいけない、

という根気を引き出している。また裏山で開墾させたりして、体力を作る。版画を作ったりもさせる。もう目の輝きが、先生がおっしゃったようにたいへん生き生きとしている。そうだ、この子たちは漢字を読めたんだ、ということに、今この本（『石井式漢字教育革命』）を読んで気がついたんですよ。

粘土を一生懸命練って、七百回も八百回も練って棒状に作っていきますね。なかなか立派な作業をしておりました。映画でもそのことを取り入れておりましたけれど、時間が長くなるので、漢字を覚えるところをカットしちゃいました。ところが先生の本を読みまして、なるほどそうだ、あの子たちは漢字が書けたんだ、漢字を学んだということが目の輝きにつながったんだと、この本を読んで気がついたわけです。やっぱり大切なことなんですね。

石井：精薄児は決して知的なものにうといんじゃないんです。ただ能力を越えたものを与えるから受け入れないんです。幼児もそうですけれど、精薄の子供たちにとっては、言葉の音声分析ができません。幼児とか精薄児というものは、言葉を全体として直感的にとらえます。分析する能力がまだ未熟なんです。〝危険〟を、大人の考えで「キ、ケ、ン」と分けて言えばよくわかるだろうと思うのですね。ところが普通この言葉は「キケン」と間を置かずに発音しています。決して「キ、ケ、ン」とは言いません。だから、普通の言い方で、「キケン」という言い方で漢字を教えてやれば、その方が受け取りやすいので、目を輝かして学習します。「春男が翔んだ空」で教室で学習する場面があって、子供が先生にあててもらいたいと思って手を上げて前へ前へと出て行く場面があるでしょう、あれです。ああいう熱心さ、純粋さは、この子供たちに特有のものですね。

山田：私も、「春男が翔んだ空」を作りながらそう感じました。

石井：皆さんがお気づきにならないようですが、ああいう子供ほど実は、知的なものに飢えているんです。人間である以上、みんな本能的に知的なものを欲しているんですね。

ところが知的なものはダメだ、受け入れるはずがない、と教える方が頭からそう決めこんじゃって与えようとしません。だから知的なものを与えれば生き生きとするのに、知的なものを与えないものだからいよいよ頭の働きがにぶくなり、いよいよやる気が衰えてくるわけです。

つまり知的栄養失調に陥っているわけですよ。ですから知的なものを、ことに漢字なんかを与えますと、目を輝かし、夢中になってやるんです。

神戸に「縦の木村」という、それはまったく村の形態を作っているものがあります。つまり「縦の木

学園」を卒業したものが、こんどは社会人としてその「樅の木村」で生活するわけですね。さきほど山田さんがおっしゃったように粘土をこねて茶碗を作ったり、ネクタイなんかも織ったり――。それから牧畜なんか牛や馬の世話をして生活しています。まったく精薄者だけで村を作っているところなんです。

その村の中に「樅の木学園」という学校がありまして、そこで学校生活をやっているわけです。こういう子供は、普通だと五分間と一つの学習が続かないと言われています。ところが、私はこの学校に漢字カルタを寄贈して、そのついでに漢字カルタの遊び方を教えてやりました。すると驚いたことに、一時間ぶっ続けにやったが、やめようとしないのです。一時間というもの夢中になってやるんですね。「もう先生、帰るんだからやめる」と言ったら、がっかりしましてね。ですからつくづく知的なものに飢えているんだなということを感じました。ただ残念ながら、先生方にそういう理解がなくて、野杉先生のような指導をして下さる方が乏しいんです。

山田：私の娘は、中学二年なんですけど、今もって自分の名前が書けないんですよ。これまでは「やまだ・みき」とひらがなで教えていたんですよ。ところが先生の本を見て考えついたことは、この本に書いてあるように「山」という字の方がやさしいんですね。何でちゃんと漢字を教えなかったんだと反省したんですよ。今でも「やまだ」なんて書けない。「みき」もやっと。「き」も「さ」と似たようなことになっ ちゃう、一本足りないということなんですね。あの映画の中で「危険」という字を書いている女の子がいますね。母親も驚いた。今まで書いたことがない、あんな字を。ところが映画では、中学の子なんですが、永さんを初めからホンモノの野杉春男先生だと思っちゃったわけですよ。だから授業のシーンも、ほんとうの勉強と思っちゃって。ところが、〝危険〟という字が書けないんですよ。それが自転車を使って、これは危険だよと教えたらすぐ覚えた。それで感じましたのはただ、漢字を教えただけで覚える子はいない。漢字の持つ意味ですね、それを教えてやるということが大切だということです。

石井：子供には何よりも、経験するということが大事なんです。

山田：ほんとうに危いということ、ほんものの自転車を使ってやったわけです。子供たちにも〝危険〟とわかったんでしょう、漢字で書いたんです。ぼくは驚きました。実を言うと、どう書くのかと心配していた。カメラを据えっ放しでずっと望遠で撮っていたんですよ、そうしたら、カットを見たら、書けてるんですよ。ぼくも驚きましたが、母親たちも驚きましてね。もちろん学校でそんな字は教えは

しません。初めての経験なんです。その、〝危険〟という意味がわかったということで、覚えるものなんですね。私も撮映の体験で、なるほどなと思ったんですが、そういう点がやっぱり大事なことで、まず意味合いをわかって体験する、経験する、そういう中で覚えていく、意味合いで体験して覚えていくということ――。私は、映画のたったあの場面だけでも、できた子がある、と驚いているんですよ。この本(『石井式漢字教育革命』)を読んでいたら、そういうことも、もっとうまくやったんですがね(笑)。

体験が能力を伸ばす

石井：脳障害児を持つ父親の手紙（月刊「幼児開発」昭和五十年二月号掲載）の中にもありますがね、〝馬〟という漢字を教えるために競馬場の厩舎まで連れていっているんですよ。普通の子供だったら絵本で十分だと思うんですが、その子の場合「これが馬だ」と厩舎で見せて、そのついでに〝馬〟という字を教えますといっぺんに覚えちゃう。この子は、こういう体験による漢字指導を受けて一日に一文字ずつの割り合いでどんどん覚えていきました。

山田：障害児ですか……。

石井：脳障害児です。

山田：ＩＱはどのくらいなんですか。

石井：ＩＱはこの子の場合、測定が困難ではなかったかと思います。

山田：もう一つご質問したいんですが、脳の発育は、ハードウェアとソフトウェアの部分があって、ハードウェアは三歳ごろまでにできあがってしまい、四歳ごろからソフトウェアが作られていくというんですが。ソフトウェアはこの本を見ますと、百二十五歳まで人間はできるんだという。知恵遅れの子ですね、いわゆる精神薄弱者はソフトウェアができないんですか、それとも三歳までにできるという、ハードウェアができていないということですか。どうなんでしょう、子供によって違うと思いますけれど。

石井：ハードウェアが三歳までにできると言いますが、そのでき方にみんなかなりの違いがあるわけです。しかしながら、この本では脳の良し悪しをカメラにたとえて説明していますね。三千円の安いカメラだからと言って、でき上がった作品が悪いとは限らないわけです。十万円のカメラだって、それを使う技術を養わない限りは、つまりそれはソフトということになりますが、それをやらないといい作

品ができない。たとえ三千円のカメラでも、ソフトの方をしっかりやれば立派な作品ができる、こういう考え方です。だから私どもはよほど頭脳の方がそこなわれていても、適切な学習さえすれば、ソフトの面でいくらでもよくすることができる、つまり、りっぱな働きをする頭ができる、というように考えております。

詰め込むことから弊害が……

山田：反復ということをおっしゃってますね。まったく反復ということは大事だということに気がついたんですけれど。

石井：これが一番大事なんですが、しかし、これくらい、今の教育でなおざりにされているものはないんです。

山田：ですから一つ覚えるとすぐ違うことを教えて、繰り返さないということが……。

石井：新しく違うことを習うこと、つまりたくさん覚えることが知能を増すことだと考え違いしています。そのことが今の教育における最も大きな間違いだと私は思っています。

学習して、いろいろなことをたくさん覚えることが、頭を良くすることだと、こう考えている。それよりも、一つのことを徹底して繰り返し繰り返しやった方が、ずっと頭の働きを良くするのです。

山田：〝人生一××〟といった言葉もありますね。

石井：例えば将棋の名人でも、図画の大家でも、その道で一流に達した人は、みんなそれぞれすばらしい人生観を持ってますでしょう。それと同じことなんです。結局人間というのは、あることを徹底して繰り返し繰り返しやる、その技量を高めていく、ということが一番すばらしいことなんであって、何もかも、あれもこれも知っているということがいいことじゃないんです。その意味でも、今の学校の通信簿をご覧になればわかりますように、これが悪い、あれが悪い、これも力を入れましょう、あれも力を入れましょう……。

私は教育というのは、最近特にそう思うのですけれど、できないものはできないと、早く見切りをつけた方がいい。例えば長島や王に、野球以外に、何を期待するんでしょう。野球に徹し、野球のことを朝起きてから夜寝るまで考えても、まだ至らない余地が一生通じて残っているはずです。一つの道でも、そのくらい深いわけですよ。

ところがあれもやる、これもやる、そのために何もかもついていくだけの能力を特っていない人間はみんな、いわゆる落ちこぼれと言われるものになってしまう。つまり、落伍者の烙印を押されるわけなんです。ほんとは落伍者なんていうものはないと私は思っているんです。どんなに能力が劣ったものでも、何かしら優れているところがあるわけでして。私は精薄学級には直接の関係はありませんけれど、もう三十年近くそういうものと結びつきがあって、よく知っておりますが、あの映画の中で、植木に水をやることを自分の任務だと思えば、雨の降っている中でも水をやる。普通の人が考えれば馬鹿々々しいと思うでしょうが、あれは精薄児だけが持っている優れた美点だと私は思うのです。

山田：普通の子にはやれない、馬鹿々々しいようなひたむきさですね。

石井：私が長く奉職しました東京・四谷第七小学校というのは、新宿で一番先に特殊学級を置いた学校なんです。ですから私は、その特殊学級の子供たちとそこで七年間、一緒に暮らしておりますからよく知っているんですが、あそこは小学校から中学まで九年間、ずっと一貫して学習するようになっているんですが、あそこの子供は、卒業生がみんな会社や工場などの職場で歓迎されているんです。

なぜかと言いますと、いまの子供の特っていない純真さ、一つのことをやらせれば忠実にわき目もふらずにそれをやる。もちろんすぐには技量の方が、また知能がともないませんから、応用はききません。そのかわり、言われたことだけは実に忠実に行なう。そのために雇い主から、ほんとによい人を世話して頂いたと感謝されています。映画に出てくるような子供たちのことも、四谷第七小学校にいましたから、よく知っております。

それで私は、特殊学級に限らず、今の教育というものは、そのあり方が根本から間違っているのではないかと思っています。それを何とかして気がついてもらって、この人間の一生を、もっともっと意義のあるものにしなけりやいけないと、そのことを訴えたい気持でいるんですけれど、なかなか微力で、そういうことができないでいるわけです。けれども、今度映画を見させて頂いて、こういう訴え方を絶えずやっていけば、何よりもわかってもらえるんじゃないかなと思って、ほんとうに拍手したい気持で、楽しく拝見いたしました。

山田：モチベーションですね、意欲ということですか、それも先生がおっしゃったように、知恵遅れの子でも意欲が出てくるわけですね。一つの漢字を覚えれば、次のというように……。

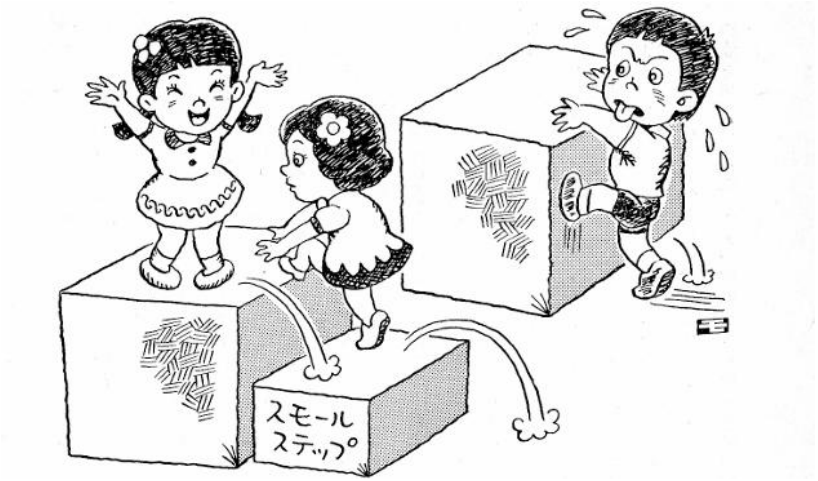
石井：それは出てきますね。野杉先生も映画の中でそれを指摘していますね。映画の中で、野杉先

生はやっぱりえらいな、と思った点がいくつかありました。北九州の教育委員会の小委員会で、野杉先生が一番最初に言っているところです。「自己身辺の処理、それから社会的適応の能力を少しでも……」とこう言い始めましてね。そして「決まった仕事をみんなと一緒に根気よくやれるといったようなこと、このことが彼らへの教育の原点であり、そのことをどうしたらスモール・ステップで……」ここらのところがや はりむずかしい言葉を使っているんですね、一般の人にはわかりにくいなと思ったのですが……。スモール・ステップなんていう言葉を使わないで、もっとやさしい言葉で言えばよかったと、私は思いながら聞いておったんですが……。

山田： さすがに先生は、せりふの一つ一つにも注意しておられる。

石井： それはそれとして、このスモール・ステップということが何よりも大事なんですね。健全な知能を持った子は、ステップが大きくても階段を登っていけます。ところが知能が低い子供たちは、そんな大きなステップでは登れないわけです。与えられるものがあまりにも能力を超えたものであるために、子供たちは挫折感を味わう。それで意欲がなくなるわけです。

ところがスモール・ステップにしてやって、普通の階段の間に一つないし二つの階段を設けてやりますと、今度は登ることができるものですから、喜んで登るわけです。登ると一段と違った気分になります。視点が高く視野が広くなりますからね。だから、学習する興味がまた一段と強くなる。そしてスモール・ステップを一段一段意欲を燃やして登るようになるんです。つまり、だれでも意欲をもって学習するという本質は持っているんです。



「人間というものは生まれながらにしてみんな盛んな意欲を持っているんだ」。私はそんなことをお母さん方に、いつも言うんですよ。ところがその意欲を打ちこわしているのは、母親や教師なんです。

なぜかと言いますと、ほとんどの親や教師は、欠点を指摘すればそれで良くなるもの、と思っているんです。叱咤激励すれば子供が意欲を出すもの、と思っているんです。だけど、

欠点を言われりゃ、だれだってショゲルんですよ。決して生き生きとはならないんです。ところが「だれだれちゃんはできるのに」「お前はしようがない」とか、ともかく子供の意欲をそぐような言い方ばかり、親でも教師でもやるわけです。

山田：確かに言われる通りですね。

石井：赤ちゃんを見ていれば、強い意欲を持っていることがよくわかります。ハイハイをする、それから立つ、立って歩く。そのどれ一つだって、赤ちゃんにとっては、ものすごい抵抗があることなんです。大体、人間が立つなんていうことは、フォークを立てるのと同じことで、不可能に近いことです。ましてや立って歩くなんていうことは、大変な難事ですが、それを可能にするのは、足腰にある何万という筋肉を微妙に調整することによって重心を取り、倒れないようにするわけです。ところが筋肉調整するなんていうことは簡単にできることじゃない。立ってもすぐに倒れる、一歩歩いただけで倒れる。それこそ大人だったら、「もうオレは歩くのはやめた」という気持になるはずですよ。ところがどんな赤ちゃんでも、歩くのを諦めたという赤ちゃんは、どこにもいないわけです。

ですから私は、モチベーションという点なら、申し分のないほど十分に、人間というものは赤ちゃんのときから与えられている。だからその意欲をうまく満足させ、意欲の向かう対象を一つ一つ克服していけば、そこにまた喜びが生まれ、意欲がさらに強まる。これは野杉先生も指摘していますけれど、「買い物ができるようになって喜ぶのは親じゃない、本人だ」と言っているでしょう、あれですよ。だれよりも本人が一番嬉しいんですよ。その喜びが次の段階をやろうという意欲を湧き起こすわけですね。

残念なことに、それを、今の教師でも親でも知らないんですよ。そして、意欲をなくすようになくすようにもっていく。それが今の教育の世界ですね。

山田：私の子供でも、悪い意味で言えば、おだてるという言葉ですけれどね、何かやると、よくできた――と、褒めてやるんです。私よりいまや背丈は大きいんですが、それでも喜びましてね、また次にやるようになるんですよ。

石井：それは子供ばかりでなくて、私たちでさえも、褒められると張り切るものです。私は親御さんたちによく言うんですよ。「Aさんという人が、石井先生は非常に気前のいい人だと言っていましたよ」というようなことを、私が耳にしたとします。そうすれば、そのAさんの前じゃあ、もうサイフのヒモなんてゆるめっ放しで、気前のいいところをみせようとするんではないか。私はそうします。私に

対してそういうりっぱな評価をしてくれた人の前じゃ、ミミッチイことはとてもできなくなるんじゃありませんか。それが人間の純粋な気持というものではありせんか。思慮分別のある大人でさえも、褒められればうれしいと思う。そして余計いいところを見せようという気持になる。人間って、そういうものだと思います。ましてや、純真な子供がそうならないはずがないじゃないですか。こう言ってやるんですよ。そう言えば親御さんたちも、なるほどという気持でうなずいてくれます。

山田：おだてだとわかっていても、ついサイフのヒモをゆるめる（笑い）。

石井：私には子供が二人おりましてね、上が三十一、下が二十七になります。私はよく子供の前で「ほんとうにうちの子はいい子だ」って、心からそういうことを言います。そのせいかますます子供も、おやじの期待に添おうと努力している様子がみられます。三十一の大人になって一人前の社会人になって、それで褒めてもらっても、子供がテレくさく思うんじゃないかというようなことを言う人がいますけれど、決してそんなことはありません。やっぱり親が、「ほんとうにうちの子はよい子で、親は幸せだ」と心からそう言えば、子供もそれをいかにも満足気に聞いてくれます。そしてやはり親のその期待にできるだけ添おうと、子供というものは努力するものです。私は、それが子供を一番よくするモチベーションだと、そういうことをよく親御さんたちに言うんです。そういう言い方しますと、かなりわかってもらえるようなんですけれど、やはり気持の上でわかるというのと、日常生活でそれを実行するということの間は、どうも距離があって、なかなか行なえないようです。

けれども子供を持ったら、褒めるべきところをよく見つけてこれを褒めてやる。もちろん褒めるほどの価値もないものを褒めれば、これは効きません。おだてだとだれもわかってしまいますから……。おだてはいけません。やはり親自身ができるだけ、心から感心するということが大事です。素直に心から喜んでやるということ、これが、一番やる気を子供に起こさせるようです。

山田：先生がおっしゃった逆の意味で、愛のムチという言葉がありますね。私は全国の特殊学級のある学校の連合会長をやってますので、ときどき映画のこともあって行きまして、親御さん、先生たちからいろんな話をうかがうんですが、愛のムチというのはやっぱり知恵遅れの子でも、尊敬する先生と尊敬しない先生で受け取り方に差が出ているわけです。尊敬している先生から愛のムチをバーンとやられても、お尻をぶたれても反発しない。自分が悪かったんだと反省するわけです。

石井：おっしゃる通りです。

山田：その点、いまの教師は愛のムチというのを誤解している。愛のないムチを打っちゃって、子供たちから信頼されているかどうかという問題をつきつめて考えていないような気がする。ほんとうに信頼されていたら、指摘されても、愛のムチを一発お尻にぶたれたって、決して反抗したりしません。その点ぼくは、いまの教師の姿勢がきっちりしてない。これが教育という中で大きな力だと思うのですが。それを先生方は、忘れてもらっては困る。

つまりいいことをしたときは、いいと言ってくれる先生だったら、子供たちは信頼しますよ。ああ褒められた、もっといいことをしようという気になりますよね。ところがめったやたらに怒ったりしている先生は、信頼されなくなるでしょう。そのときほんとうに悪いことをしていて、「お前、なんだ」と言っても、その子供は反発するだけ。そういうことが落ちこぼれ人間を作ったり、ヘルメットかぶってどこかに暴力をやりに行くような人間を生むことになっちゃう。何か、愛というものが抜けたムチが多すぎるんじゃないかと思います。

教師は真の〝偽善者〟に

石井：教育でも信賞必罰ということが大切だと思います。とにかくいいときには褒め、悪いことは徹底して叱る。これをほんとうに神様のような気持になってやることだと思います。私はね、あの映画の中で佐野校長さんが、「偽善ということもいいじゃないか」と言っておりますね。私も同感で、教師というものは、ほんとうに偽善者にならなければいけないと思っています。ただ私は、偽善ということについて普通より少し違って考えているかも知れませんが……。

と申しますのは、私は漢文学が専攻なものですから孔孟の道はもちろん、「荀子」も学んでいます。「荀子の性悪説」というものがありましてね、荀子は性悪説を唱えたために、どうも誤解される面があるんですが、人間的に言えば荀子という人は立派な人でしてね、孔子のひ孫弟子くらいになる人です。私はある意味では、孔子の学問を、ほんとうによく理解した最高の人物の一人だと思っているんですけれど。

とにかく人間というものは、明らかに「性悪」と言ってもいい面があるわけですからね。それだからこそ人間は努力して、人に迷惑をかけないようにしなければならない。そのことに努めなければならない。その努めることが人為です。〝自然〟に対するものが〝人為〟で、それが偽です。偽という字は

〝イ〟（ニンベン）に〝為〟（ナス）と書きます。つまり、人間が自分の意志をもってやろうと努めるのが〝偽〟なんですね。善というのは、努力してやらなければできないことなんです。だから善とは偽である。だから偽善なんですよ。

私はそういう意味で、初めから人間というものは、努力して善いことをやろうとしなきゃいかん、大体、孔子でさえも「心の欲するところに従えども規をこえず」と言っているのは、七十歳になって初めて到達できた境地なんですからね。私どもが努力しないで、善いことができるはずがないと思います。だから私は、いつでも自分にムチ打ってがんばっています。教師となって立つ以上は、自分をできるだけ立派に、自分自身が伸びる姿勢を持たなかったなら、子供たちに何にも教えられないのではないでしょうか。人を教える前には、まず自分の身を正す、つまり偽善者にならなければ教育はできない、という私は考えております。ですから映画の中で、校長さんが野杉先生にああいうことを教えたということはすばらしいと思って、そこのところに感動して観ました。

漢字こそ日本語の基礎

山田：先生と私は年齢がそう変わらないので、われわれの中学時代（旧制）のことはおわかりと思いますが、私たちのときは中学一年から漢文をずっとやりましたね。私は開成中学だったんですけれど、たいへん英語の先生もよかった。漢文を教える国語の先生にも立派な人がおられました。漢文をやっておりますと漢字を覚えますが、その点で今先生がおっしゃった〝偽〟ということなんか、漢字の時間によく習ったものですよ。どうなんですか今、漢文はぜんぜんいらないということになっているけれど、どうなんですかねえ、漢文というのは……。

石井：私は、日本語というものは漢字を用いて表わさなかったなら、絶対に日本語の持っている本質はわからない。漢字は日本語を表わす最高の文字だと思いますね。例えばハナというような言葉でも、ハナというのは、元来突出したところをハナというわけです。ですから、漢字で書けば〝端〟という字が一番合っていると思います。ところが顔の中で一番突出した部分は鼻ですね、ですからこのハナという言葉は、今は漢字で鼻という字を使っていますけれど、大和言葉で言えば、元来は端という意味の言葉なんです。それから咲く花も、あれはみんな端に咲いているわけです。中間に咲くような花はないの

でして、みんな端っこに、つまり端に咲いているものなんですよ。ですから、今では「花」という字をあてていますけれども、花という言葉の場合でも、大和言葉の突端という意味で使ったのだと思うのです。

ところが、いまや花の場合は花という漢字で書き表わします。それから、顔のハナは鼻と書きます。しかも鼻から出てくる液体は洟と書きます。〝洟（サンズイ）〟に〝夷（エビス）〟という字を書くあの洟という字です。

このように、漢字というものは日本語とまったく違った言葉、中国語を表わすために作られたものですけれど、それをそのまま借りてきて、日本語の漠然としているハナという言葉を、このハナの場合は端という字、この場合は鼻という字、桜のハナは花で、鼻から出てくるハナは洟という字を使って表わす。



山田： ハナという一つの概念が、漢字ではっきり意味づけされるわけですね。

石井： このように区別することによって、それまで漠然としていた言葉というものが、非常にはっきりしたものになり、整理されました。だから漢字の多い文章は、一目見ただけで何を言おうとしてるかが実によくわかります。これは大和言葉でさえもそうなんですから、ましてや校舎、講堂というような言葉（漢語）になりますと、同じ「こう」という言葉が、校舎の校は学校の校です。講堂の講はレクチャーの意味の講。講義の講です。同じ「こう」でもまったく内容が違うわけです。ところが今の教育では、「こう」と発音を表わすかなでしか教えない。

ですから言葉に対する繊細な感覚というものが発達しません。校舎のこうと、講堂のこうとが違った内容を持っているということを理解させるには、漢字で教える以外にはないのです。

これは実は戦後に始まったことでなくて、こういう教育は明治以来、百年の長きにわたって行なわれているものなんです。教育のこの堕落、退廃というものは、戦後起こったものではない、すでに明治の

義務教育が創られた時に始まった、というのが私の考えなんです。

私が今書いているものがあるんですが、教育というものは、義務教育などという言葉が起こった時、すでに教育の退廃があったというように書いているんです。教育というものは、義務とか権利とかというものではなくて、もっと人間としての本能的な、人の子の親として、自分の経験を次の世代に、自分の跡継ぎに伝えたいという、その愛情から発する本能的なものなのだ。そのようなものに対して、そういう教育にたいして、義務教育などという名前をつけることに、すでに教育を誤らしめる原因があった。と、そのように考えています。

山田：教育に対する心構えが、スタートから間違っていたということですね。

石井：それから映画の中にもありますが、親たちが、「学校におまかせすれば、それでいいじゃないか」と言っていますが、こういう考え方が一般にありますね。しかし、そんなものではなくて、できようができまいが、自分の経験から獲得したものをどこまでも子供に伝えようというのが教育だと思うんです。ですから私は、義務教育なんていう言葉が作られた明治の初めに、もう教育の堕落が始まったと考えているのです。それに輪をかけだのが、敗戦という未曾有のできごとです。けれども、これは拍車を加えただけであって、すでに教育というものに対する考え方の間違いは明治から始まっている、そう考えております。

基本を徹底する教育を

石井：私はいろいろな身障児を診てきましたが、いま私が直接指導している子というのは、実は少のうございましてね、一時期、私の研究所へ毎週二日ずつ通ってきている子供がいました。まったくしゃべれないような、言葉がまったく覚えられない子供でした。これが、漢字を根気よく見せてやりましたら、ちゃんと漢字を識別できるようになりましてね。人間の脳というものは、使えば働きがよくなるようにできているものです。こういう子供にとっては、その漢字の持つ意味がわかるということは、もう大変な喜びなんです。知的な欲求を満足させるからなんです。そしてその喜びが、つぎの学習に対する意欲を駆り立てるのです。おおよそこういう子供は、一年かかってもかなを一文字も覚えられないのが普通です。

例えば愛子ちゃんという子ですが、愛子の〝あ〟の字が一年かかっても読めるようにならなかったそ

うです。ところがその子が、漢字だと一日に一文字ずつちゃんと覚えていきました。それは漢字というものが、さきほど言ったスモール・ステップに当たっているからです。

山田：私の娘とまったく同じケースです。

石井：その子供にとっては〝あ〟というまったく音声だけで、何のイメージも伴わないものを頭の中に描くなんていうことはまったく不可能事です。これは知能の低い子供にとって、まことに興味のない学習になります。ただ発言だけで、何の意味もありません。

その上、それを表わす字形が、漢字のような必然性を備えていません。これが「あ」という字だといくら言われたって、少しも面白くないわけです。だから子供にとっては、まったく床から天井へ飛びつくような、不可能な仕事をさせられているわけです。だから、一年たっても覚えられないのも無理はありません。

ところが、漢字だとその事情が一変します。猫を飼って、猫をかわいがっている子供なら、「これが猫という字よ」と言って漢字を見せてやれば、「ああ、これが猫という字か」と、心がはずむわけです。そして「これが猫なのか」という思いで字を見ますから、頭の中にそれがかっちりと収められ、猫という字形が頭脳に焼きつけられるのです。それを反復して見せてやるのです。払は必ず一日に十五回やれ、と本の中に書いております。

一日に十五回、猫なら猫という字を教えたら、必ず翌日「これは何という字か」と尋ねれば、必ず「猫」と答えられるんです。漢字が読めるようになるんです。だんだん重なっていきますと、もう頭がそういうことで使われますから、つまり、頭を働かせますから、頭の働きもよくなって、猫という漢字を見ればすぐに猫と読める。それが頭の働きですからね。それを繰り返し繰り返しやっていれば、自然に目も生き生きと輝く目になるし、いろんなものをやってみようという意欲もわいてきます。

また、それまでは、すぐにカーッとなって、両親も手がつけられないような状態になったのに、そういうことがなくなったと言います。半年くらいの漢字指導で。それからお医者に診てもらうときも聞き分けがなくて、看護婦さんとお父さんの二人がかりでないと、診てもらえなかったと言います。それがやはり漢字をたくさん覚えて読めるようになりますと、もう「独りで診てもらう」という意欲が湧くのですね。「お父さんは廊下に待っていていい」と言うようになった、ということです。そのときの父親の喜びが手紙に書かれています。

そういうように、一つの能力というものをしっかりと養えば、つぎからつぎと別の能力が発揮されていくものです。だから私は、教育というものは「あれもこれもやれ」ではなくて、基本的なものを徹底してやらせることだと思います。ところが、今の教育というものは、「あれもできなきゃならん、これもできなくちゃならん」。それも、それを常に一番できるヤツと比較させられて、ハッパをかけられる。親や教師というのは、たいていそういうものですよ。

山田：どうしても、自分の子はよい子になってもらいたい、という欲があるから（笑）。

石井：払はよくそのことの間違いをわからせるために、こんな例をもってきて言うんです。「お母さん方は、色白のかわいい子を見ると、自分の子とすぐに引き比べて〝まあなんてかわいらしい子だろう。うちの子もあんな色白のやさしい子であったならどんなに嬉しいだろう〟と、そう思う。ところがこんどはそれとまったく反対の赤銅色をした、元気溌溂とした子を見れば、〝まあなんて元気ない子だろう、うちの子もあんなに活発な子であったらいいのに〟と思う。しかし考えてごらんなさい、白い子を見てはわが子を不満に思い、赤銅色の子を見てはまた不満に思う。その両方を兼ね備えた子といったら、こっちの半分が白くて、こっちの半分が黒いということになります。それで満足できますか」

と言ってやるんです（笑い）。そう言いますと、親というものはどんなに貪欲なものであるかということ、そして、その望みがまったく不可能なことを望む誤った望みである、ということがよくわかってもらえるのではないかと思って、よくそういう言い方をしています。

しかし、これが色白とか色黒とかという表面的な場合は、目で見えるからよろしい。これがもっと内面的な性格ということになると、むずかしくなります。たとえばおとなしい子を見れば「なんてまあうちの子はがさつだろう」と思います。ところが活発な行動力に富んだ子を見ると、「うちの子はおとなし過ぎて困る」と嘆きます。この場合は案外その矛盾に気がつかないものです。一人の人間が、優しさとたくましさと、この二つを兼ね備えるということはあり得ないことなんです。ところがそういう行動力の富んだ子を見ては、わが子と比較し、それからまた反対の落ち着いた子、どちらかというと行動力に欠けている子ですけれど、おとなしい子を見れば、それをうらやましく思い、わが子を不足に思う。そして自分の子供に「Aという子供を見てごらんなさい。あんなにおとなしいじゃないの」と言って責める。それからBという行動力のたくましい子をみると、「あのようにやりなさい」と言って要求する。一人の人間に、そんなことができるはずがないではありませんか。

ところが、学校の教師でも親でも、みんなそれをわが子に注文するわけです。それじゃあ子供にすれば、もう挫折感しかありません。劣等感を持つのが当たり前というものです。これでは、意欲を喪失するのが当たり前です。勉強はだめでも野球ができる子は、野球ができるだけで結構ではありませんか。それを認めてやって「すばらしい」と言って褒めてやり、できない勉強には触れない。野球ではすばらしい長島でも王でも、学問ではそれほどではないと思いますよ（笑）。いや、長島や王は算数がとてもよくできるかもしれません。しかし、できなくたって、ちっともかまわないわけなんです。算数のできないことが、長島や王の値打ちを決して下げることはないからです。私はその人間の優れたところを見出して、それを認めてやり自信を持たせ、意欲を持った子供になるように導いてやることが教育であると言いたいんです。

四十八歳の方向転換

山田： 親にしても、先生にしても、欲が深過ぎるんですね。あれも、これもできる子であってほしい、そうでなきゃならないと……。

ところで、先生が従来の義務教育に疑問を感じられて、「石井式漢字教育」を始められたのは、いつからですか。

石井： 「一般に漢字で表わされている言葉は、初めから漢字で教えよ」という意見を、私が一番先に発表したのは昭和二十六年ですから、今から三十年近くも前ということになります。

それを発表したときには、ぜんぜん相手にされませんでした。いや、それよりも、「とんでもない暴論だ」と受け取られたようです。

というのは教育長から注意を受けまして、「君は文部省の教育を批判し、新しい教育法を提案したそうだが、そういうことをするのは大学教授のような学者のやることであって、指導主事としては逸脱した行為である」と言われましてね。確かに指導主事としては逸脱した行為だと私は思ったものですから、指導主事をやめる決心をしました。

それと、もう一つやめる理由がありましてね。それはまったく小学校教育の経験を持たないものが、小学校の先生を指導するということ、これは良心を持っていたらやれないことなんですよ。そういうこともあって、指導主事をやりながら、つまり、小学校の授業を見ながら、小学校の教師の免許状をとり、

昭和二十八年に晴れて小学校の教師になりました。それから昭和四十二年までの十四年間、小学校の子供たちを実際に教えました。

山田：主義を実行に移したわけですね。

石井：その間、昭和三十六年に『私の漢字教室』という本を書きまして、それに日本の教育がどんなにとんでもない誤りをしているか、ということを書いて発表しました。この本は、十年間に数版、版を重ねるくらい売れたんです。かなり読まれたわけですよ。それにもかかわらず、この教育を実践する先生は、期待するほど現われませんでした。

五、六年続けて実践する学校はあるんです。実践した学校は、いずれもりっぱな成果を収めています。ところが、この教育の推進者である校長、もしくは国語主任がやめたり、転勤したりすると、それを機にやめてしまうわけです。その理由は、教材作りという余計な苦労があるからというよりも、差がつく教育だということで、他から圧力がかかるので、次第にいや気がさしてくるんですね。

だから、一小学校教師に過ぎない私なんかが、いくらがんばっても、どうにもならないとそう思いまして、昭和四十二年、小学校を退職しました。それは私が四十八歳の時でしたが、この四十八歳というのには意味があるんです。警察署長だった私の父が、方向転換を計り、退職して百姓を始めたのが、四十八歳の時だったんです。私も四十八歳になってみて、「父はこの年で大決心をしたんだな」と思うと、自分も思い切ったことをしてみようと考えるようになったんです。そこで、「小学校の教師をやめて、この教育を広める運動に専念しよう」と思い立ちまして、家内にそのことを相談しました。

ところが、家内は大反対です。昭和四十二年のことですから、子供は二十一歳と十七歳です。「これから子供の学費が要るという時に、安定した職を捨てるなんて無茶だ。勤めさえしていれば、月給は上がるし、退職しても恩給がいい。今やめたら退職金は少ないし、恩給だってもらえない」と言って反対するわけです。そう言われても、私の決心は変わりませんでした。「一年だけ辛抱してほしい。一年たって、見込みがないとわかったら諦めて何でも言われる通りにしよう」と言って家内に食い下がりました。すると、「もう子供も大きいんだから、子供の意見も聞いてみようじゃありませんか。子供が賛成するというなら、私も賛成します」と言って、家内も折れてきました。それで、二人の子供を呼んで相談しましたら、「お父さんのやりたいことをやって、そのためにぼくたちが学校に行けなくなっても結構だ。自分たちは何とかやっていくから、お父さんは好きな道を進んでください」って……。

それで家内は、アテがはずれたわけです。家内としては、上の子供がまだ大学に入ったばかりですからね。下の子供だってまだ高校、大学と残ってますから。だからきっと自分に賛成してくれると思ったわけなんです。そうしたら二人の子供が私の決心に同意してくれたものですから、小学校の教師をやめて、今までの研究をまとめ、これを世間に訴える運動を始めることになり ました。だから、まったく定収入というもののない不安定な生活の中で、新しい道に進んだわけです。それから十年間以上、いろんな本を書いて世間に訴えてきたんですが、なかなか思うようには参りません。

山田：それにしても、いいお子さんを特って、よかったですね（笑）。家庭の安定を考えたら、なかなかできることじゃありませんからね。

教師は、もっと実行力と意欲を

石井：いよいよ実践が始まりまして、各地の幼稚園、保育園や特殊学校を回り、私の教育法を理解、実行してもらうようにしたんです。ところが、この特殊学級へ行ってみましても、漢字を教えている所はありませんね。私がいくら「漢字の方がよく覚えますよ」と言ったってダメなんです。いまの先生方には、実践力に富む、意欲のある先生がほんとに少ないと思います。その点、島根県出東小学校の特殊学級の柳楽寛子という先生は、私の著書『石井式漢字教育革命』を読んで、「カナよりも漢字の方が覚え易い」と知って、すぐ実行した。実に実践力に富む先生だと思います。子供が漢字を書き出して、目が輝いてきたといって、先生もいよいよ張り切っています。（第3章参照「4出東小学校の記録」一四九頁以降参照）

山田：女の先生ですね。女の先生の方が割り合い度胸がありますね。よいと思ったらすぐ実行してみる……。

石井：そう言えば、辻昌子さんという先生もいました。この先生は、今から二十年近く前、特殊学級の漢字教育について発表しています。私が実践を始めてまだ十年になるかならないころの話です。神戸市立大橋中学校で特殊学級を担任していまして、私の著書『私の漢字教室』を読んで、それによって漢字教育を実践したんです。非常にいい成果が出て、教育委員会主催の研究会で発表したんですよ。私も期待していたんですが、間もなく結婚されて先生をやめてしまわれました。

山田：それは残念ですね。

石井：実は、例の「樅の木学園」の宮本三郎園長さんというのが、そのころ大橋中学校の数学の先生をしていらっしゃいましてね。数学の先生ですが、漢字教育に大層熱心で、この先生が辻先生に推めて、それで辻先生がやったというわけなんです。この宮本先生は、兵庫県の教育功労者として表彰されまして、今から七、八年前、樅の木学園の園長になりました。

それで「園長になったから、石井先生、一つ〝樅の木〟の子供たちを指導してくれないか」と言ってこられました。

ここの子供はみな重度の脳障害児や精薄児で、知能指数も測定不可能というような子供が多くいました。前にも言いましたように樅の木村という村の中に寝泊まりして、先生方が生活を共にしながら、教えているわけです。けれどもまた、この先生方にも脳性マヒなどの身障者がいるんです。ですから不自由な体で、顔がひきつれるような症状を持った者が、大変な努力をして、大学教育を受けて、立派な先生になって、同じ不幸を持った子供たちの教育に当たっていらっしゃるわけです。

まあそういうわけで、園長に「来ないか」と誘われ、私は気軽に引き受けて行きましたけれど、初めて子供たちに会ったときに、今までの特殊学級の子供だちとはずっと違った、重度の障害児、精薄児の顔を見て、思わず息を飲みました。「話そうと考えてきた話はとても通じまい」そう思って、狼狽しそうな自分を必死にこらえたあの時の気持は、今でも、汗が出る思いがするほど、鮮かなものがあります。それでも気を取りなおして、話を始めました。

実に長い一時間でした。教室の周囲に飼っている鳥や獣の名前を漢字で黒板に書き、その動物について話をしました。しかし、聞いてくれているのか、どうか、まったく反応がわからなくて不安でした。さて、時間の終わりに、黒板の漢字を尋ねてみますと、驚いたことに読むんですよ。話の間にちゃんと覚えたんですね。それで私は思いを新たにして、よしこれならいけるというので、園長にもう一回やらしてくれと言って、それから一、二か月後に訪問しました。この時、私はサルカニ合戦のお話の用意をして参りました。カードを作りましてね。猿、蟹、



蜂、臼、栗、この五つの字を二十センチ四方くらいのカードに書いたものを用意しました。そしてそれを人形芝居の人形の代わりに使って「山から猿が降りてきて」とか、「蟹は川から上がってきました」とか、ゼスチュア入りで始めたんです。そして話を終わりまして、この五枚のカードを一枚ずつ取り出して尋ねてみました。すると驚いたことには、間違って読む人は一人もいないんです。園長はもうびっくりして見ていましてね。私も驚くやら、感激するやらでした。

私はそれ以来、人間というものは、生命力さえある限り、漢字の覚えられない子供はいない、生きて呼吸ができる以上は漢字が覚えられないことはないんじゃないか、という信念を持つようになりました。事実、私が直接指導しているのではありませんが、重度の脳障害児が毎日一字ずつ漢字を覚えていった実例があります。（第一章「ある脳障害児の成長の記録」参照）これは、一歳八か月のとき、ダンプカーにはねられて……。

山田：ダンプカーにはねられて――。

石井：そうです。ダンプカーにはねられて、頭骸骨が陥没するという致命的な重傷を負いました。普通なら即死ですよね。何日間か意識不明の重体で、やっと奇跡的に命をとりとめたんですが、それだけに後遺症もひどかったわけです。この父親に会ったのは、教えるために行ったときが初めてで、それからもう一回、都合二回だけです。この父親から八か月くらいして手紙がきました。「ぜひこのよくなった娘を見てもらいたい。八か月前とは違った子供を先生に一度みせたいから東京へ連れて行く。だから、会える日を知らせてくれ」と言ってきたんですよ。そのころちょうど金沢に行く用事があったものですから「こちらから出かけて行く」という返事を出しました。最初に会ったのは七月七日、七夕の日でした。それから年が変わって、三月に金沢に行く途中で、一時間くらい下車して駅の近くの喫茶店で、親子に会いました。

ちゃんと挨拶もりっぱにできますし、何よりも表情が明るい。父親と話しながら様子を見るのですが、母親とにこやかに話をかわしているのです。最初の印象とすっかり変わって特殊児童とは思えない態度なんです。そして改札口で別れるときに、「うちの子は、おかげさまでこのようになって明るい希望を持つことができましたけれど、世の中にはこういうお子さんがたくさんいて、悩んでいる父親や母親のことを思うと、自分一人だけが喜んでいられないという気持でいっぱいです」と、私に語ったことが印象深かったものですから、その話を『幼児開発』の編集長に話しましたところ、早速、それを雑誌に書

いてくれということで発表したものです。

これは、この本の中にも冒頭に書きましたが、本当にまだ指導を始めて八か月間の、短い間のレポートです。この子は今は三百以上の漢字を覚えています。

山田： それじゃあ普通児以上ですね。

石井： 普通児でも三百字の漢字ができない子供はいっぱいいますからね。

山田： 私もまず自分の子供にやってみなければいけませんね。

石井： 漢字は喜んで覚えますよ。そしてね、本当に意欲をもってやりますからね。一日に一文字覚えることくらいは、たやすいことなんです。そして、漢字を覚えて、これを読むということは、大変な喜びなんてすね、どんな子供でも。

カリキュラムの進め方にも疑問

山田： それとは別に、今の義務教育のすすめ方にも問題があるんじゃないですか。

石井： 私はね、歴史なんかだって、あまりむずかしいことをやりすぎると思います。私は小学校の歴史は（今は社会科と言うんですが）英雄か何か、人々の手本になるような人物を教えるだけでいいと思うのです。そして大きくなってから、そういう人間が活躍した世の中というものは一体どういうものだったか、ということで、学習させればよいと思うんです。初めっから、弥生式時代がどうのこうのなんていうむずかしいことを、小学生のうちからやる必要はちっともないと思うんです。

私が、東ドイツの小学校教育がすばらしいと思うのは一、二、三年の三年間は社会科も理科もないということです。徹底して読み書きをやるんです。読み書きの力を養えば、その力を必ず活用したいという時期が、そのあとに来るんです。その時に理科や社会科をやらせれば、理科でも社会科でも、興味をもってやることができるわけですよ。一、二年生のうちから、社会科だ、理科だといったって、満足に読む力がない時に、そんなものを興味をもってやれるはずがない。私は読み書きの力をしっかりつけろと言いたいんです。

例えば、東ドイツでは二十四時間のうち十四時間までが国語です。これは、四十分授業にすると、毎日二時間ないし四時間、国語学習をしていることになります。日本では一日に一時間、多い日に二時間あるだけですよ。ところが東ドイツでは三時間から四時間が国語、そのほかの教科は一時間か、多くて

も二時間しかないの です。

山田：日本では、算数、社会、理科、とつめ込みをするが、親がほんとうに覚えさせたいのは字なんですよ。ところが覚えさすという順序が間違っている。まず、ひらがな、カタカナから始める。胸や名札に名前をつけるものも、ひらがな、カタカナで、漢字じゃないんです。そういうふうになっているから結局、自分の名もなかなか書けないようになってしまうんですね。

石井：名札だって、漢字にしますと子供はたちまち覚えちゃうんですよ。われわれだって、かなばかりで書かれている名札はなかなか読めないものです。チラッとみただけでは、とてもだれ君だかわからない。漢字ですと一文字か二文字ですからね。一目でパッとわかる。これは、幼稚園のどこでもあることなんですが、漢字教育をやっている幼稚園では、みんな漢字で名札を書かせているんですよ。ところがそうしなさいと言うと、先生の方はたいてい反対する。「そんなことを言って園長先生、子供たちに読めるはずがありません。そうしたら困るのは私たちです」。たいてい先生方はそう言って反対するそうです。

それで、ある幼稚園では、園長さんが「そう思う人は、かなで書いても結構です、私の言うことを信じる先生だけ、漢字で書いてください」と言ったそうです。そうすると、名札を漢字で書いた組の方は、一日でみんな覚えてしまってまったく混乱がない。ところがかなで書いた方の組は一週間たっても相変わらずゴチャゴチャ。それで今まで漢字の名札に反対していた先生も「園長先生、間違っていました。私も漢字にさしてもらいます」と言ってきたそうです。

私が学校で一番さきにやったときは、一年生の下駄箱は全部かな書きにするのが当然だというような習慣がありますから、私のとこだけ漢字にしてはいけないと思って、かなで書きました。そうすると毎日、子供が「ぼくの靴がない」と言ってくる。靴がないんじゃない、ちゃんとその子の名前のところに入っているわけなんですが、自分の所がわからないわけですよ。

それで、ぼくの靴がなくなったと言うので、その子のゲタ箱を捜すのですが、かな書きのその子の名前を捜すのが骨がおれるんです。あのころは五十人から五十五人いましたからね。これをつぎつぎと見ていくというのは、とても大変なんです。かなで書いてあると、みんな同じに見えて、非常に見付け出しにくい。漢字で書いてあれば、パッと一目でわかるんです。それは幼児でも先生でもまったく同じことなんです。かなで書いてあったら、だれの名前でも読めますが、読めるから必要のない他人の名前ま

で、一つ一つていねいに読んでいく。だから、大変な時間がかかります。ところが漢字にしますと本当に簡単です。漢字ですと、かなで同じものでも異なった字になりますから、自分の名前が、たくさんの名前の中からパッと目に飛びこんでくるんです。だから活字の中から自分の名前を捜し出すということは、漢字で書いてあれば実に簡単にできますでしょう。

ところが、それがなかなかわかってもらえないんです。特殊学級の先生には、私はかなり奨めたんです。またいろんな本にも書いているんですが、なかなか納得してもらえないですね。

もっと実際に即した教育を

山田： ところで、文部省のやり方には、ことあるごとに反対する日教組ですが、こと授業内容に関するかぎり、文部省の指導するカリキュラム通りですね。

石井： 本当にそうですね。私なんか十四年間小学校の現場で、文部省の教育は間違っていると言いつづけてきましたからね、日教組が当然賛成して一緒にやってくれると思ったら、ぜんぜんやる気配がない。ぜんぜん見向きもしない。

山田： そういう点おかしいですね。

石井： 文部省のやる政治的、資格的なものには反対するという意見はあるんですね。ところが、教科内容になるとまったく言われた通りです。

山田： 特に特殊児を持つ親とすれば、日教組はもっと実際に則した教育をして欲しいんですが……。

石井： 井深大さんのやっている幼児開発協会の教室を私がやっていたころですがね。そこでわずかに一週間に一時間、精薄の子供の指導をしたことがあります。ご存知の通り、精薄児と言いますと、死んだような鈍い目をしています。輝きがないわけです。ところが八か月くらいで、目がキラキラと輝くような子供になった。

この子は今六年生くらいになっているだろうと思いますが。学校の成績は、いま普通児として中以上の成績をあげています。やっぱり早く教育方法を見つけて、早く漢字をうんと読めるようにしてやることですね。これをすれば、私は精薄児だって普通児以上の、むしろいい成績をあげることができるようになると思っています。

大脳生理学の時実利彦先生がおっしゃっていますように、三千円のカメラだから十万円のカメラに劣

るとは限らないわけですよ。十万円のカメラだって使い方の研究をしなければ、いい写真が撮れるはずがないんでしてね。三千円のカメラだって絶対に悲観することはないと、私は本当にそう思いますね。

だから、早くから漢字教育をほどこすことによって、頭を使うように仕向ければ、子供自身がその喜びを感じますから、生き生きとしてきて、グングン伸びるようになります。井深さんがこういう幼児教育に熱心になったのも、やはり、お子さんのことにあるんじゃないかと思います。うちの子だってもっと早く気がついて手を打っていれば、もう少し何とかなっていたんじゃないか、という思いがあるんじゃあないか。それが幼児教育に、あのような熱意をもっていらっしゃる理由ではないか、と。

山田： 私も一生懸命宣伝いたします。

石井： 私はクラスを持つと、すぐに親を集めて約束してもらうことがあるんです。それは石井は日本で一番いい先生だと心から信じてもらいたい、ということです。親が信じれば、子供はかならず信ずる。信ずれば、かならず教育の効果があがる。それはね、私は一生懸命にやるつもりだけれど、やはり人間ですから欠点もあるし、不満もあろう。それに人間というのはタデ食う虫も好き好きで、どんなにいいことをしたつもりでも、気に食わん、いやなヤツだと、こう思うこともあるだろう。しかしそう思ったら、教育というものは決して成功しない。だからどんなに不満であろうとも、この石井は立派な先生だと心から思って、間違っても子供の前で、私の批判がましいことだけは言ってくれるなと――。

山田： それは大事なことですね。

石井： だから、小学校や幼稚園の先生方にもこれを奨めるんです。それをやらなかったら、いくら一生懸命に子供を指導をしたって、逆効果を招く恐れがある。だからかならずそれだけは親に注文つけておきなさい。そして教育をやれば効果が上がる。意外なくらい先生方というのは、親と協力しようという気持がない。むしろ親を敬遠したり、軽蔑的な感情を持っている。

山田： この節は、先生方も母親に負担をかけすぎるんですよ。

石井： そういう面もありますね。つまり自分がすべきことを、親にするように要求するんですね。それは大変な間違いです。

山田： 宿題を能力以上に出すんで、ぼくは、怒ったんですよ。宿題は親がしちゃう、あの子たちは、やりゃしないというんですよ。

石井： 学科の指導は教師の責任です。できないときには、できるように教師が最善を尽す。できな

いから、親に助けを乞う。これでは 逆で、教師としてこれほど恥ずべき行為はない。

「お宅の子は算数が不得意だから注意して下さい」なんて言うことですが、私はこういう通信簿なんていうものは、百害あって一利もない。と思っています。家庭との連絡簿にしたって、書き方がみんな逆だと思います。自分のすべきことを、親にするように要求するんですから。教師は教育の専門家です。教師の教師たるゆえんは、算数をできるようにしてやるとか、国語をできるようにしてやるとかいうことであって、それができないから、親に助けを乞うのではいけません。親にだってできるんだったら、何も学校はいらないわけです。ところが教師はそういう要求をするんですよね。

山田：もう一ついけないと思うのは、これは特殊学級の場合なんですが、母親なんかがよくついて行くでしょう、教室に入れているんですよ。いかんと思うんですよ。ぼくは、家庭をシャットアウトして、その中で教師が責任をもって教えることが教室なんだと。何でも親がついていくと入れてしまう。子供の前でやったってだめなんだと言うんですよ。子供も親を意識して——。教室では親なんかシャットアウトする、授業参観は別として、シャットアウトしてやれと言うんですが、なかなかそれが実行されないですね。

石井：とにかく親も教師も、よほど考えなおさなければいけないことがたくさんありますね。